

## 14日 水曜

### 哀歌



4:1 ああ、金は黒ずみ、美しい黄金は色あせ、聖なる石は、道端のいたるところに投げ捨てられている。

4:2 高価であり、純金で値踏みされるシオンの子らが、ああ、土の壺、陶器師の手のわざと見なされている。

4:3 ジャッカルさえも乳房をふくませて、その子に乳を飲ませる。しかし、娘である私の民は、荒野のだちょうのように無慈悲となった。

4:4 乳飲み子の舌は渴いて上あごにへばり付き、幼子たちがパンを求めても、割いてやる者もない。

4:5 ごちそうを食べていた者たちは街頭で瘦せ衰え、緋色の衣で育てられた者たちは堆肥をかき集めるようになった。

4:6 娘である私の民の咎はソドムの罪よりも大きかった。人の手によらずに、一瞬で崩壊したソドムより。

4:7 その聖別された者たちは雪よりも清く、乳よりも白かった。そのからだは珊瑚よりも赤く、容姿はサファイアのものであった。

4:8 しかし、彼らの顔はすすより黒くなり、街頭でもそれと分らない。彼らの皮膚は干からびて骨に付き、乾いて木ようになった。

4:9 剣で殺される人は、飢えで殺される者たちより幸せであった。その者たちは、畑の実りがないために、瘦せ衰えて死んでいった。

4:10 あわれみ深い女たちが、自分の手で自分の子を煮た。娘である私の民が破滅したとき、それが彼女たちの食物となった。

エルサレムが敵に包囲されて、食料も水も枯渇した時に、これほど悲惨なことが起きました。それは

単に辛いというだけではなく、人としての尊厳が失われたのです。醜くなったのは外見だけでなく、親の心さえもはや子を想うことさえできなくなってしまいました。そのような出来事が国中を覆うのですから、全くの絶望状態にあります。

エレミヤがなぜこのような悲惨さを書き残したのかというと、それは民の罪を知ってもらいたいからでした。敵の攻撃ではありますが、それは主の守りがなくなってしまってからであって、なぜ守ってもらえないかということ、民が主に再三背いたからにはほかならないからです。

もしもイスラエルに希望がないなら、エレミヤは預言する必要はないでしょう。何よりも主は彼に預言せよとは言わないでしょう。現実を認め、主の御心を悟り、自分の間違いや足りなさを認めることは、主からの回復につながってゆくことを信じましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

